白梅学園大学・短期大学図書館報

花みづき

第26号／2012.4.1
白梅学園大学・短期大学図書館
小平市小川町1-830 TEL042-346-5626

「子どもの頃からの本の思い出」

子ども学部教授・学部長　小林 美由紀

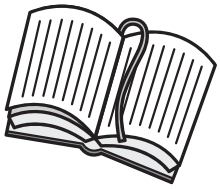
最近の人は、文字離れして、本を読まなくなったと聞くことがしばしばある。本の情報はすぐにインターネットで入手できるし、電子本なら何百冊を簡単に持ち歩くこともできる。だが、逆に読んでみたい本がなかなか手に入らなくて恋いこがれることもなくなった。もしかしたら、手軽に身近にあるのがいけないのかもしれない。

幼少時の本の記憶は余りない。今ほどに絵本や子ども向けの本がなかったからかもしれない。母や祖母が、寝床で昔話を語ってくれて、何度ももっともっととせがんだのが記憶に残っている。

私が、夢中になって本を読むきっかけとなったのは、小学校4年のときだった。そのときは、近くに図書館もなければ、図書室にも満足に本も置いてなかった。担任の先生は、その状況を慮って、移動図書館なるものをクラスに持ち込んだ。1か月間、クラスに40冊の本を置いておき、出来るだけ多くの本を読むようにと課題を出したのである。強制的な読書習慣というのもいかがなものかと思うかもしれないが、そこは、子どもの天真爛漫さで、誰が一番早く全部を読み終えることができるかと、競争をし出した。冒険ものや、ファンタジーなど様々なジャンルの児童書があったが、その中で、私の心に残ったのは、「ビルマの竪琴」だった。これは、戦争が終わり、日本に帰ることになった兵士の一人が、帰国せずに、ビルマで僧になる話である。決して明るい話でないこの物語がなぜ児童書なのか、そして、なぜ主人公は、帰国することを選ばず、戦渦の傷跡が残る異国の地に留まったのか、そのことは、長く心の澱のように残ったのである。子ども向けの本は、明るく楽しいものと思われがちだが、実は、長く心に残るのは、こんな暗く重たい話であったりする。そこに、この物語が、あえて「児童書」であった意味が大人になってから納得いったのである。おそらく、通常の図書室に置いてあったら、読むことのなかった本だろうが、移動図書館という限られた場所にあったからこそ、出会うことができた本だった。

この本を読む競争のお蔭で、本を読む習慣がついたが、それでも楽しいことばかりではなかった。中学生のときの国語の先生は、なかなか魅力的な先生で、大酒飲みだったが、授業はいつも楽しい話題を持ち込んでくれた。生徒達を大笑いさせた後に、真剣な表情で語ってくれた石川啄木の詩の魅力は、心の琴線に触れたものである。その先生が出した夏休みの宿題は、その当時の中学校では、どこでもありがちな読書感想文だったが、指定された本は、パール・バックの「大地」だった。公立中学生にこの大作を課題に出した先生もたいしたものだと今更のように思うが、この本を夏休みいっぱいかかって読んだ毎日は、本当に大変だった。かつての中国の農村女性の3代に渡る人生の物語だが、一代目の女性の毎日は、これでもか、これでもかとつらい日々が続く。いったい何だって、こんな不幸な小説を宿題にするのだと呪ったものだが、次第にこの主人公は、何でこのつらい人生を生きているのだろうと小説の世界に入り込んでいた。そのうち理不尽な人生を力強く生き抜いている女性の魂が2代目、3代目に引き継がれていくことに気が付くのである。そして、初めからとっつきやすい小説にはない感動が、ひたひたと湧き上がってきたのを今でも覚えている。

その後も色々な本と出会ったが、本に没頭するときは、どちらかというと、人生に悩んだり、迷ったりしているときが多い。まさに本に「出会って」、気持ちが定まることもあった。本の魅力とは、実はひとりひとりにとって様々であろう。それだけに、もしかしたら、心の人生に深く関わっているのかもしれない。



タイの幼稚園と私

子ども学科 卒業生　梶川　智代

私は海外の日本人幼稚園にとても興味があり、大学の求人の中に唯一あったタイのバンコクの幼稚園に就職を決めた。もともと大学在学中に留学の経験もあったので、海外に住むことに不安を抱くこともなく、当時は早く行きたいという気持ちでいっぱいだった。去年の 4 月 1 日にタイに入国し、初めに感じたのは「暑い…」ということ。タイは 1 年中熱帯気候だが、その中でも特に 4 ～ 5 月は暑いのだ。この暑さの中で暮らしていけるか…ということが初めに感じた不安だった。

仕事が始まり、私は 2 歳児の担任になった。（私の幼稚園では満 1 歳半から受け入れが可能となっている）私のクラスは当初 8 人と少ない人数でスタートした。海外の幼稚園の特徴として、在園している子どもたちの家族はほとんど駐在員なので、その滞在期間によって子どもたちも途中入園、退園が多いのだ。私のクラスは途中退園する子はおらず、入園が多かったので 3 月には 10 人増えて 18 人となった。

2 歳児クラスでの保育はとても面白い！ 1 年間を通して子どもたちはまるで別の生き物かのように成長する。2 歳児の活動は主に生活習慣を身に付けることが中心になっている。食事・排泄・午睡など、ひとりひとりの子どもたちの様子を見ながら、それにあった対応と援助を行っていく。特にこの学年は月例の差が激しく、3 月生まれの子と 4 月生まれとでは成長にも大きく差があるので、そこをしっかりと理解して援助していかなければいけない。

私は保育する時に、ほめることで子どもたちをのばしていきたいと思っている。これは研修の時に先輩の先生から学んだことで、ほめることで子どもたちは「これでいいんだ！」「ぼくだってできるんだ！」などと自信をもてるようになり、それはその後のやる気にも大いにつながる。もちろんいけないことをしている子に対しては、叱ることも大切だが、ただ叱るのではなく、何がいけないことだったかを納得するまで考えさせることが必要だと思う。また子どもたちの話をしっかり聞くこともとても大切だと考えている。この学年はまだ言葉がカタコトな子も多いが、その時感じたこと、思ったことを伝えたいという気持ちが強く、自分の知っている言葉で一生懸命伝えようとしている。そういった姿を大切にしたい。子どもは大人が気づかないような小さな発見を日々の生活の中でたくさんしている。そういった発見を子どもと共感し喜びあえるような保育者になりたいと常に考えている。

この幼稚園には日本人はもちろんだが、タイ人ハーフの子どもも多い。家庭によっては、日常会話のほとんどがタイ語の家も多く、保育の中でも、言っていることが理解出来ず、活動についていけず、日本人の友達の輪の中に入っていけないという姿も見られる。そういった子への対応に初めはとても悩んでいた。しかし出来るだけ、わかりやすく伝えるために活動の中で視覚的な教材を多く使うようにし、言語で理解できなくても、見てわかるように取り組んだ。また話すときもジェスチャーをつけて、少しでもわかりやすく話すように心がけるようにした。そういったことを繰り返す内に子どもたちが、以前より理解している姿が見られるようになり、また理解できる喜びから、日本語を話すことにも自信をもてるようになったのである。子どもたちの日々の成長が私の保育者としての喜びであり、励みになっているのだ。

そんな楽しい幼稚園生活を送っていたころに、タイに大洪水が起きた。例年よりも何倍もの降水量によって、北部から水がバンコクへ徐々に押し寄せてきたのだ。そして 9 月頃にアユタヤの工場地域が水没し、この水がバンコクに押し寄せてくるという情報が入った。この時から園児の中にも数名が一時避難のために日本に帰国し始めた。洪水がバンコクに近づくにつれて、園の継続が問題となっていた。この時、現地の小学生以上の日本人学校が休校した場合には、幼稚園も休園するという判断基準としていたため、その連絡が何時入るかわからず、どこにいても緊急連絡がとれる体制としていたので、皆、緊張状態が続いていた。10 月後半になり、バンコクまで水が来ることは確実となり、園はほぼ毎日休園となった。そして職員は洪水対策をしなければならなくなり、トラックで約 ４００ 袋の土嚢を取り寄せ、それを門や、建物の入り口に積んだ。土嚢はとても重く 1 人では持ち上げられず、職員全員で数時間かけて運んだ。これはとても辛く、過酷であった。11 月に入り、園児の半分以上は帰国し、そして私たち職員も非難したほうがいいという命令が出たので、私も日本に一時避難のため帰国した。こういった状態はその後 2 ～ 3 週間続いた。しかし、水はバンコクの一部地域に浸水したものの、その被害が全領域にまで及ぶことはなく、幸いにも幼稚園には被害はなく、11 月半ばにはタイにもどり、園は無事再開した。再開当初、園児数はとても少なかったが、その後続々と園児がもどり、年末には 8 割以上の園児がもどってきた。この洪水によって、苦労したこと

街の風景。水の浸入を防ぐために、土嚢が積まれている。

もたくさんあったが、改めて助け合うこと、力を合わせることの大切さを知った。

タイでの生活は大変なこともたくさんあるが、日本では体験出来ないような楽しいこともたくさんある。この国の文化や人々と触れ合い、今までの人生ではできなかったことをもっとたくさん体験していきたいと思う。

最後に今私のクラスでとても人気のある 1 冊の絵本を紹介したい。あきやまただしさん作の「へんしんトンネル」という絵本だ。かっぱが「かっぱかっぱかっぱかっぱ～♪」と言いながらトンネルをくぐると、「パカッパカッパカッ」と馬になって出てきてしまう、ということから始まり、色々なものがトンネルをくぐり抜けると、別のものに変身してしまうのだ。子どもたちは、初めて読んだ時はなんで変身するのかが理解できず、トンネルに入って別のものになって出てきてしまうということに、ただ驚き楽しんで読んでいるのだが、何度か読んでいくうちに、「かっぱかっぱかっぱかっパカっパカッ、パカッ！？」あれ？変身しちゃったよ！と、自分たちで言葉の入れ替えに気づく姿が見られ、読めば読むほど、楽しい絵本だ。これは日本の子どもたちにもぜひ読んであげてほしい 1 冊だ。

終わりの言葉として、私は在学時から文章力もなく、レポートも大の苦手で、この原稿を書くことになった時、「本当に私でいいのだろうか…。」という不安な気持ちでいっぱいだった。でも、これを読んで、少しでも多くの人に海外の日本人幼稚園とそこで頑張っている幼稚園教諭・保育士の姿を知ってもらい、興味を持ってもらえたら幸いだな…と思います！

職場の同僚と梶川さん(右側)。

最後まで読んでいただき、どうもありがとうございました◎

東日本大震災発生時の図書館の対応

図書館職員　森　なを子

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生しました。震災から 1 年経過した今、改めて発生時の図書館内の様子、その後の対応を振り返ってみたいと思います。

地震発生時

地震発生時、図書館内には職員 2 人（通常 3 人、1 人は休暇中）、アルバイト（学生含む）2 人、計 4 人が勤務中、幸い利用者は誰もいない状態でした。職員 1 人の声かけのもと、4 人で 1 階の大きな柱につかまって揺れが収まるのを待ちました。書架がギシギシと音を立てて左右に揺れる様子は、今まで目の当たりにしたことがない光景でした。

一通り揺れが収まった後、図書館がある E 棟内で避難を促す声かけを行いつつグランドへ避難。その後、休暇中の職員とも連絡が取れ、無事を確認しました。被害としては本が数十冊落下した程度でしたが、落下の衝撃で破損があり、大部分は修理できたものの 7 冊は修理不能で除籍処分となってしまいました。

書架振動の衝撃により曲がった、スチール製ブックエンド

震災以前より、一部の書架には転落防止装置が設置されています。揺れを感知すると自動的に棚下部のバーが跳ね上がって本の転落を防止します（右側写真参照）。また、各書架は床に固定、書架上部に梁を渡して連結させるなど転倒防止対策を行っています。

2011 年度前期

図書館は翌 3 月 12 日より休館、新年度の 4 月 6 日より時間を短縮して開館となりました。白梅学園がある小平市は計画停電の対象となっており、停電前に図書館システムサーバを停止させる措置も行っていました。

4 月 6 日からは授業時間短縮と連動し 9:15 ～ 18:00（大学院生は 20:00）を利用時間とし、同時に館内の照明を間引く、利用者用 PC の稼働台数を減らすなどの節電を行いました。また、5 月 16 日以降は学部学科生の利用を 19:00 までとし、最終的に 9 月 21 日（後期授業開始日）より利用時間を震災前の通りとしました。

また、図書館内に災害発生時の避難経路の掲示を行いました。赤い矢印で避難経路が示されていますので、今一度確認をお願いいたします。

2011 年度後期

後期は主に節電対策に努めました。また、「東日本大震災・原発を考える」と題し、震災と原発に関連する図書の企画展示を行いました。

転落防止装置が働き、転落を免れた本。装置が作動しなかった棚もある。

おわりに

今後、図書館にいる際に地震が発生した場合は、まず書架・ガラス窓から離れて下さい。また、職員の指示に従い、グランドへ避難して下さい。

いまだ続く震災被害報道は、胸を痛めることばかりです。図書館として何ができるのか、改めて考えさせられる日々です。

本にふれる環境

子ども学研究科修士課程　須藤　麻紀

幼稚園の現場を離れ大学院に入学した私は、より一層本にふれる環境の大切さを感じるようになりました。入学したばかりの頃、「出来る限り多くの文献にふれよう」とほぼ毎日図書館に通っていました。保育現場にいた時も読書はしていたのですが、日々の中心は保育であり、図書館に通う時間を確保することは容易なことではありませんでした。だからこそ、一学生に戻り様々な分野の文献にあたって自分の幅を広げ、内省することに時間を費やせることは喜びでした。大学図書館では、文献複写や資料の取り寄せ、大学にない本をリクエストさせて頂くこともあります。毎回丁寧に対応して下さる素晴らしい図書館スタッフの皆さんの存在は、本当にありがたいです。白梅学園大学の図書館は、専門分野の文献や資料が充実しています。そして何より丁寧にサポートして下さる図書館スタッフの皆さんの存在も魅力です。院生となり、改めて本にふれる環境について考えてみた時に保育現場でのある出来事を思い出すことがありました。

私が実践していた幼稚園では、週に 1 度子どもたちが絵本を借りる日がありました。いつでも好きな本を手にとれるようにと各クラスに絵本棚があり、子どもたちはそこから毎週借りていきます。特に、はじめて自分の借りたい本を選ぶ体験をする 3 歳児の姿は興味深いものでした。例えば、毎週同じ本を借り続ける子がいれば、反対に同じ本は絶対に借りない子もいます。一度に同じ本を 2 冊借りていく子、朝から借りる本を決めている子、お迎えの時間まで借りたい本が決まらずやっと決めることができて笑顔になる子など本を選ぶ際の子ども達の様々な姿をみることができました。ある時、毎週同じ本を借りていく子のお母さんから連絡帳を頂きました。それには、“ いつも同じ本ばかり借りてくる〇〇(名前)。「今度はお母さん違う本もみたいな」とか言ってみるのですが、やっぱり毎週同じ本なのですよね。でも本当にこの本が好きなのだな～と思ったりして。私もそれにつきあって楽しんでみようと思います。” とありました。その子にとってこのお母さんの眼差しは、本にふれる環境の大切な一部分だったのではないかと思うのです。

書籍内容の充実はもちろんですが、サポートして下さる人の存在もまた本にふれる環境の大切な一部分なのではないでしょうか。最後に、今後も今ある環境を大切にし、院生生活が充実したものとなるよう励んでいきたいと思います。

●●●図書・文庫貸出ベスト 10●●●
（2011／1／1～2011／12／31）

順位	回数	書名
1 位	22回	子どもが語る施設の暮らし
2 位	21回	もう施設には帰らない〔1〕
3 位	20回	子どもが語る施設の暮らし2
4 位	17回	施設で育った子どもたちの居場所
4 位	17回	いいんだよ、そのままで
4 位	17回	夢をかなえる力
7 位	16回	世代間交流学の創造
8 位	15回	母と子のきずな
8 位	15回	もう施設には帰らない2
8 位	15回	虐待を受けた子どもの回復と育ちを支える援助

例年通り、施設実習の課題図書がよく貸し出されています。

また、草野先生ご著書「世代間交流学の創造」が初ランクインです。

●●●ビデオ・DVD 閲覧ベスト 10●●●
（2011／1／1～2011／12／31）

順位	回数	書名
1 位	74回	着信アリFinal
2 位	62回	着信アリ2
3 位	57回	（持ち込み資料）
4 位	50回	モンスターズ・インク（ディズニー）
5 位	41回	恋空
6 位	39回	リトル・マーメイド（ディズニー）
7 位	35回	着信アリ
8 位	34回	天空の城ラピュタ
9 位	33回	美女と野獣（ディズニー）
9 位	33回	ホーム・アローン〔1〕

2011 年は「持ち込み資料」が初のランクインです。授業に関係あるもの、調査研究のためのものであれば図書館内で視聴できます。

持ち込みの際、図書館カウンターにておたずね下さい。